

東京カレッジ・シンポジウム 抄録

『世界』とは何か？ —哲学・歴史・文学・宗教を／から考え直す—

日時：2019年7月10日（水）17:00～19:00

場所：東京大学 山上会館大会議室

パネルディスカッション

司会：伊達 聖伸（総合文化研究科）

パネリスト：羽田 正（東京カレッジ）

中島 隆博（東洋文化研究所）

沼野 充義（人文社会系研究科）

藤原 聖子（人文社会系研究科）

伊達 聖伸（総合文化研究科）



本日のシンポジウムでは、哲学、歴史学、文学、宗教学の各分野において、「世界」とは何なのか、「世界」を分析枠組みとすることでどのような人文学の未来を切り開けるのかという切り口で考え直してみたいと思います。まず、パネリストの先生方から、「世界史」、「世界哲学」、「世界文学」、「世界宗教」という言葉の概念の来歴と現状を説明しながら議論を展開していただきたいと思います。

羽田 正（東京カレッジ）



「問題提起と歴史学の場合」

1. 2050年の人文学と現在の世界史の理解

人間、世界、宇宙とは何かを考えることを人文学というなら、それは、言葉が生まれて以降ずっと続いていますが、現代の私たちが知る学問として体系化されるようになったのは19世紀から20世紀初めの西洋においてだと考えられます。そこで生まれた見方や考え方が日本語に取り入れられる過程で、従来の日本の学問に西洋のものが接ぎ木され、日本独特の人文学が生まれたと考えていいでしょう。

しかし、2050年を考えたときに、今のままの人文学の枠組みでいいのかという疑問が生じます。人文学の研究分野と枠組みは不変ではないわけです。研究対象も変わるし、アプローチ方法も変わるでしょう。そういう中で、世界を枠組みとする研究が歴史、思想、哲学、文学、宗教などの分野に出てきています。このことをどう考えればいいのでしょうか。

これまで主流の世界史のとらえ方は、世界は幾つかの国や地域に分かれ、それぞれが歴史を持っているという考え方でした。その前提は、人間集団がそれぞれ異なっているとい

うことです。この理解に従うなら、国や地域を別々の単位で分けて、その部分ごとに時系列に沿って歴史を解釈してゆくこととなります。世界は一体としては理解されていません。このとらえ方は、「自」である国や地域に強い帰属意識を持つ人たちを生み出す一方で、それ以外を「他国」や「他地域」として区別する見方につながります。

2. 新しい世界史の提唱

そこで私は、「新しい世界史」を提唱しています。それは「地球の住民」という帰属意識を生み出す世界史です。自と他の区別を強調する世界観だけでは、グローバル化が進む世界に対応できないと思うのです。国籍や言葉、性別、年齢などが違って、みんな同じ地球の住民だという意識を持てば、世界で起こる地球規模の問題に対してより有効に対処できるのではないのでしょうか。そして、「新しい世界史」を実現するための方法として global history を提唱しています。

しかし、そう簡単ではありません。歴史学は文献資料に基づいて研究を進めますが、様々な言語で記された世界中の大量の資料を一人で読めるわけがないからです。また、「新しい世界史」を強調すると、一国史が不要だと言っていると受けとられがちです。それは本意ではありません。丁寧で説得的な説明が必要でしょう。

日本語の人文学では、今日のように「世界」を共通概念として比較的簡単に議論できますが、英語にした途端にうまくいかなくなります。世界史を英語にすると、「world history」となりますが、これは西洋中心的な歴史の見方、という意味も持っています。だから私は英語圏ではあえて「global history」を使います。このような言語による解釈の違いをどうすればよいのか、もう少し詰めていかなければならないと思っています。

中島 隆博（東洋文化研究所）



「『世界』とは何か 歴史・宗教・哲学・文学を／から考える」

1. 世界哲学という概念

世界哲学という概念はそれほど広く流通してはいませんが、ないわけではありません。「世界的な哲学」もしくは「世界の諸哲学」という意味ですね。前者の理解に対しては、哲学自体が普遍的なのだから、「世界」という限定詞を付ける必要はないという反論が出てきます。そのため、世界哲学は世界各地の哲学の総和であるという意味で理解される方が多かったかと思います。

2. 転機

しかし、世界哲学に転機が訪れました。昨年、北京大学で行われた世界哲学会議（World Congress of Philosophy）で、われわれ日本チームが「世界哲学」という概念を新たに提示したのです。それは、何か単一の中心のある「世界的な哲学」でもなければ、地域哲学の寄せ集めや総和としての「世界の諸哲学」でもなく、新しい形で普遍に向かっていく哲学の運動を世界哲学として提示しようとしたものです。しかし、あえなく撃沈しました。

もう一つの転機は、オックスフォードから出された The Oxford Handbook of World

Philosophy にインドーチベット仏教哲学という論文を寄稿した Garfield 先生と、もう一人中国哲学研究者の Van Norden 先生の二人がニューヨークタイムズに、「現在アメリカで行われている哲学は欧米哲学にすぎず、哲学の名に値しない」という批判記事を載せたことです。それに対しては、多くのネガティブな反応があったそうですが、今後は別の方向に向かっていくと思います。

3. 来るべき世界哲学とは

来るべき世界哲学を考えなければならないと思います。その試みはあちこちで始まっていて、昨年東京大学で開催しました「世界哲学としてのアジア思想」会議においてもブレット・デービス先生が、先ほどの批判記事に対するネガティブな反応について、「哲学とはより開かれた学問であるはずなのに、分析哲学なら分析哲学という地域哲学に基づいた特殊なイメージしか持っていない。その貧困をわれわれはどうやって乗り越えていくのか」と再反論しているわけです。

哲学的な諸概念は各地域哲学を超えて世界を大きく循環しています。世界哲学はこうした概念の大きな循環を考えていかなければならないでしょう。と同時に、ある種の在来の理論についても当然考えなければなりません。そういう局面に世界哲学はあると思います。

最近の展開をご披露しますと、「世界哲学としての中国哲学」というシンポジウムが開かれました。これは、東京大学と北京大学とのジョイントプログラムである東アジア藝文書院がサポートしたもので、中国社会文化学会が主催したものです。同じように、比較思想学会でも「世界哲学をリードする日本哲学」というテーマの講演会が開かれました。このような試みから、哲学を世界哲学として再定義することによって普遍に開き直すことができると思っています。

沼野 充義（人文社会系研究科）



「世界（文学）とは何か？」

1. 「世界文学」の理念

「世界文学」という言葉を最初に使ったのはゲーテでした。『エッカーマンとの対話』の中で、文学は人類の共有財産であり、世界文学の時代が到来していると述べています。しかし、必ずしもその理念が実現しているわけではなく、世界は複雑で多様です。現代では新たな世界文学論が展開されています。

その背景として、国別の文学分類が難しくなり、越境的なものが増えたことが挙げられます。それから、世界の文学の脱中心化が進んでいます。また、文学作品がグローバルに流通・翻訳されている現状があります。

それと並行して、新しいタイプの世界文学全集が出てきています。例えばデイヴィッド・ダムロッシュ氏らが編集した『ロングマン世界文学アンソロジー』は、古代はメソポタミアから現代は村上春樹まで収められており、完全に西洋中心主義の文学観が崩れています。

新たな研究分野の可能性としては、世界システム論的なアプローチがあり得ると思います。それから、実証的影響関係ではなく世界的共振性の観点から、従来比較できなかった

ものを世界の文脈で研究する姿勢もあり得るでしょう。それから、翻訳と流通のプロセスへの着目も新たな研究分野を切り開くといえます。

しかし、世界文学的な視点は、何よりも文学の読み方を提唱するものであると思います。現代世界は非常に多様ですが、それに対してどう関わるかということです。それは教育上でも大きな意味があると思います。「一国史は要らないのか」という話がありましたが、個別のディシプリンを専門的に学ぼうとする人の文学的教養の基礎が、世界を見ることではないかと思うのです。

2. 現代文芸論研究室の試み

そこで、世界文学論的なアプローチのできる柔軟な研究室として、人文社会系研究科・文学部に2007年、現代文芸論研究室を創設しました。フランス文学やドイツ文学、日本文学といった個別文学ではなくて、広く文学を見ていく場を設けたわけです。

ハーバード大学の世界文学研究所が毎年夏、世界各地でサマーセッションを行っているのですが、昨年は東京大学で開催しました。文学研究を国際的な世界文学の場に開いていく試みとしては非常に貴重なものだったと思います。

世界文学とは、理念でもあり、現実でもあり、実践でもあり、特に強調したいのは、自分とは異なる複数の世界・他者があり、それに関わる姿勢そのものであると思います。

藤原 聖子（人文社会系研究科）



『世界宗教』と宗教学

1. 問題化される「世界宗教」概念

「世界宗教（World Religions）」という言葉は、19世紀にヨーロッパで生まれたものですが、二つの意味があります。一つは、民族宗教の対語としての世界宗教で、主に、キリスト教、仏教、イスラムを指します。日本の用法ではほとんどがこの意味ですね。もう一つは、「世界のさまざまな宗教」という意味です。この場合は、ユダヤ教もヒンドゥー教も「世界宗教」になります。欧米圏では今はもっぱらこの意味です。なぜかといえば、最初の意味では、は、世界宗教の方が民族宗教より上だとすることになるからです。そのような意味の「世界宗教」は20世紀に多民族社会化する中で、維持できないものになったのです。

しかし、二つ目の意味の「世界宗教」も、現在の宗教学では問題化されています。その「世界宗教」概念に基づき「世界宗教史」をとらえると、羽田先生が指摘された、従来の世界史記述と同様の問題が発生するからです。つまり、個別宗教史の束としての世界宗教史の問題です。

2. 「世界宗教史」の不在

では、こうした概念の問題を反省した上で、新しい世界宗教史が書かれているかということ、まだと言っていいでしょう。特に、一つ目の意味の「世界宗教」の問題が、欧米の研究者の間で本当に克服されているかということと疑問です。というのも、ヤスパースの「軸の時代」論は現在も時々踏襲されているのですが、ということは、民族宗教と世界宗教の間

で大きな転換があったという考えが続いているはずだからです。その点では、世界宗教の二つの意味を両方克服した新たな世界宗教史の構築を日本から訴えることができるのではないかと考えています。

3. 注目される「世界〇〇教」「グローバル〇〇教」

付け加えますと、最近「世界キリスト教」「グローバル神道」といった概念・研究があり、こちらは人気です。特定の地域を中心に発展してきた「〇〇教」が、20世紀後半から世界各地に広がり、相互に影響し浸透し合っている状況を指しています。世界哲学や世界文学に近いニュアンスがあると思います。

4. 宗教研究の普遍性への異議申し立て

私自身の関心は世界宗教史の書き直しの方ですが、それには世界の研究者との連携が必要です。そこにおける大きな壁は、ヨーロッパで始まった、世俗的な観点から宗教を分析する宗教学は普遍的なのか、それを受け入れないアジア・アフリカの研究者とは連携できないのかという問題です。両者の間をつなぐことが日本の宗教研究者の大きな課題だと思っています。

伊達 最初のご発題からは、それぞれの学問が西洋中心主義からシフトしてきていることがはっきりと見えてきました。そのような状況のなかで今日「世界」を考えるときに、翻訳や境界、越境が非常に重要になると思います。その点はいかがですか。



羽田 私自身、日本語で議論するときと外国語で議論するときでは同じようにいかないことを体験しています。翻訳は当然考えなければならないことですが、翻訳するといっても、例えば、world history と世界史からして1対1で対応しないので、そこが大きな問題です。意味が異なると解釈の仕方は異なるし、立場が違っていると見方も違うので、同じ過去の事象であっても異なって解釈されます。

しかし、一方で、立場性を全く無視した人類共通の歴史理解や歴史認識は存在しないだ

ろうと私は思います。別の言い方をすると、世界中の人たちが全く同じように世界史を理解することはあり得ないと思うのです。さまざまな世界の過去の捉え方があるのだけれども、共通のプラットフォーム的なものがあり、相互に相手の立場を理解しあうことが一番大事ではないでしょうか。こうした言葉を超える問題をどのように考えていらっしゃるのか、ぜひ伺ってみたいです。



中島 哲学では、「世界」という概念自体を疑います。なぜなら、複数性の問題にものすごく神経をとがらせているからです。もし世界が「全体化するもの」である場合には、ラディカルな複数性を想定しづらいという問題があると思います。世界自体の複数性を考えることが重要です。それにはどうしても言語の問題に触れなければなりません。その良い例は空海です。空海は当時の哲学、文学、宗教においてまさに世界的な学者でありましたが、それは複数の言語を使いこなし、世界の複数性に敏感であったからこそ、あのような世界哲学を展開できたわけです。

とはいえ、世界という言葉自体が誤解を招くことも多いのも確かです。最近思っているのは、たとえば世界 (world) に ing を付けて「world-ing」として ing 形の世界を考えると、プロセスとして形成される世界、複数性に開かれた世界を考えられるのではないかということです。このことは、普遍に関しても同様で、普遍 (universality) を universalizing と ing 形で考えると、よりダイナミックなプロセスとして理解できると思います。世界の複数性が入れ子状になったようなパースペクティブを持つことができれば、世界歴史、世界文学、世界宗教、世界哲学において新しい地平が見えてくるのではないのでしょうか。

沼野 最近、むしろ世界文学が成立するためには翻訳が前提となっていて、翻訳は今までどちらかというとアカデミックな研究では二次的な部分に置かれていたのですが、重要性が非常に増していると思います。ともするとトランスレーションスタディーズ(翻訳研究)の中で閉じてしまう傾向があるのですが、翻訳は他の言語と関わることですから、結局は他者と関わる形式なのです。つまり、自分だけのことをしては分からないものでも、他者と関わることによって新しいものが開けてきます。

翻訳学ではアントランスレータビリティ (翻訳不可能性) といいますが、どれだけうまく訳せるかではなくて、なぜうまく訳せないのかという部分は人文研究のいろいろな分野で共通していると思います。だから、翻訳は単に横のものを縦にするのではなく、ある境界を超えることによって知的なエネルギーが生じるものだと思っています。



藤原 宗教学で翻訳というと、「宗教」という言葉をはじめ、1世紀前にいろいろと翻訳されたものがあり、そうした翻訳語が宗教のリアリティをつかまえるためにうまく機能していないことが問題化しています。ですから、まさに今は ing を付けて、以前の翻訳を翻訳

し直していく姿勢が根本的に必要なのだと思います。

沼野先生が「訳せないものがある」とおっしゃったのですが、宗教学では、「日本の宗教のこの概念が翻訳できなくてなかなか分かってもらえない」と言うと、「日本特殊性論だ」と総攻撃を受けます。日本の宗教が世界の研究者にとって研究価値があると思ってもらうには、これだけ日本独特なものがあるという見せ方をすれば注目してくれそうなものなのですが、すぐに日本特殊性論、日本文化論だと言われてしまうというジレンマがあります。



羽田 歴史の中でも日本の歴史は特殊だとよくいわれます。たしかに、既存の世界史の理解の仕方では、日本の歴史の展開はうまく説明できません。それはこれまでの世界史理解に問題があるからです。ですから、私は日本の歴史の展開を世界に示すことによって、世界史の全体的な見方を変える方向に持っていきたいのです。

その点では、私たちが日本語で考えたことを外国語にするという翻訳はものすごく大事です。日本は今まで外からの知識を日本語にすることには長けていましたが、日本語として熟成されているものをもう一度海外に出すという部分が決定的に欠けていたと思います。

伊達 ここからは「日本発」の人文学について伺っていきたいと思います。20世紀の学問の相対化が今の課題となり、研究者がいろいろな営為を営んでいると思うのですが、日本の学問を取り巻く状況はなかなか順風満帆とは言えません。衰退しつつあるようにも見えますが、場合によっては強みもあるかもしれません。その点についていかがでしょうか。

藤原 「日本発の世界宗教史」といった場合、日本産の世界宗教史を作るというよりも、日本から世界宗教史を書き直す運動に世界の人たちを巻き込んでいくものであり、日本人だけで作るものではないと思っています。日本で世界宗教と民族宗教を対比する構図がずっと人気なのは、近代という時代の説明に非常に有効だからだと思いますが、それはあくまで一つの世界宗教史の見方にすぎないことに私たちは気付かなければなりません。これまでの近代化論の一つのバリエーションとしての世界宗教史の語り方以外に語り方はあるのかということの問題提起する必要があると考えています。

沼野 私が文学を研究していると思うのは、人文学の中でも文学への風当たりが一番強いのではないかと思います。大学の文学部を見ても、伝統的な外国文学系の進学者は減少傾向にあり、私は非常に強い危機感を持っています。しかし、文学とは人間の言語・文化に関する最も緻密なことを扱う学問ですから、やはり人文学の基礎だと思います。そのいいところをアピールする努力が欠けていて、それぞれのディシプリンが内にこもってしまい、だんだん元気がなくなっているのです。ですから、もう少し垣根を越えて、世界文学という風通しのいい視点で文学研究の可能性を見ていくことによって、この分野の未来が開けると思います。日本発についても、日本文学の専門家が外国文学の専門家と協働して

いろいろなことができるようになると、新しい局面が開けてくると思います。

伊達 会場からの質問も交える形でお聞きしますが、「世界とは何か」という研究には、自然科学の成果も取り入れる必要があると思われます。その点はいかがでしょう。

羽田 今日の討論に自然科学者が入っていないのは、人文学の中だけでさえ共通の認識や議論のためのプラットフォームをつくっていない状況なので、そこに自然科学の先生が入ってきて議論し始めると収拾がつかなくなると考えたからです。

その一方で、日本語だけで閉じず、外国の人とも一緒に議論しなければならないとも思っています。外国の人とも各分野で議論を重ね、さらに分野横断で共通のプラットフォームをつくるための会を開いて、そこに理系の研究者も入ってくると、すごいことになるでしょう。今後はぜひ理系の研究者を仲間に入れて一緒にやっていきたいと思っています。

沼野 文学の場合、文化や言語を超えて普遍的な価値があって、誰が読んでも素晴らしいと思うものであれば、どの国の何語で書かれたものだから読むというのは本当はおかしいのです。ですから、世界文学といったときの「世界」も本当は要らないかもしれないという議論はあり得ると思います。文学を研究すればするほど細分化して、文学そのものが見えなくなってしまう可能性があるからです。ですから、やはり現実の中で人間は生きているので、その現実と与えられたコンテキストで一番大きなものは世界であって、その場で考えるということだと思います。

藤原 宗教学からお尋ねしておきたいのは、19世紀以降、特に近代の人文社会系の学問が前提としてきた世俗的な前提についてです。先ほど中島先生が「世界哲学会議を東京に招致しようとしたら撃沈した」とおっしゃっていましたが、ヨーロッパの哲学者には、世界に哲学を広げると、宗教的な哲学になっていくことを嫌がっている人がいるのではないかなと思うのです。それにどう対抗していくのかということをお尋ねしたいと思っています。

中島 おっしゃるような世俗の問題は、特に今日ではポスト世俗化が問われていますから、あらためて重要になっています。それとともに宗教学も違うフェーズに入ってきたのではないのでしょうか。その上で、あらためて世界という概念を問い直すことが重要です。

全体化する原理としての世界概念はやめた方がいいという議論は、哲学では当然可能です。ただ、それを承知した上で、世界にしても哲学にしても、違和感を生み出す概念として残しておいた方がいいと思っています。世界史、世界文学、世界宗教、世界哲学という複合語には根本的な違和感があり、それらを安心して受け止めてはいけません。ここにこそ思考が始まるチャンスがあると思います。「日本」という概念も同様で、日本哲学という複合語をじっくりしたものとして受け止めてはいけないのだと思います。よく、日本哲学ではなく日本思想だと言われますが、日本思想はしっくりきすぎるのです。それよりも日本と哲学を結び付けることによって、日本という概念の自明さを揺さぶることの方が重要だと思っています。

それから、理系の方々と対話していると、考えられている世界が奇妙すぎて、途方もな

い衝撃を受けます。Kavli IPMU の責任者である大栗博司先生からは、「重力を入れた途端にこの世界の対称性は破れていく。しかし、重力それ自体が何なのかはまだ十分にはわかっていない」というようなことを伺いました。それをさらに広げて宇宙を考えると、そこには何か説明のつかないこと、今の時点での数式や理論では説明し切れない何か剰余があると、多くの研究者が考えているわけです。わたしは、人文学はまさにこの剰余に関わる学問だと思っていますので、自然科学の方々と対話しない理由はないと思っています。

伊達 本当はまだまだ別のテーマを提示しながら議論を深めていきたいところなのですが、時間切れになってしまいました。以上で東京カレッジ・シンポジウム『『世界』とは何か?』を終了したいと思います。